

## 教師は真の“偽善者”に

石井：教育でも信賞必罰ということが大切だと思います。とにかくいいときには褒め、悪いことは徹底して叱る。これをほんとうに神様のような気持ちになってやることだと思います。私はね、あの映画の中で佐野校長さんが、「偽善ということもいいじゃないか」と言っておりますね。私も同感で、教師というものは、ほんとうに偽善者にならなければいけないと思っています。ただ私は、偽善ということについて普通より少し違って考えているかも知れませんが……。

と申しますのは、私は漢文学が専攻なものですから孔孟の道はもちろん、「荀子」も学んでいます。「荀子の性悪説」というものがありましてね、荀子は性悪説を唱えたために、どうも誤解される面があるんですが、人間的に言えば荀子という人は立派な人でしてね、孔子のひ孫弟子くらいになる人です。私はある意味では、孔子の学問を、ほんとうによく理解した最高の人物の一人だと思っているんですけれど。

とにかく人間というものは、明らかに「性悪」と言ってもいい面があるわけですからね。それだからこそ人間は努力して、人に迷

惑をかけないようにしなければならない。そのことに努めなければならない。その努めることが人為です。“自然”に対するものが“人為”で、それが偽です。偽という字は“<sup>にんべん</sup>イ”に“<sup>ナス</sup>為”と書きます。つまり、人間が自分の意志をもってやろうと努めるのが“偽”なんですね。善というのは、努力してやらなければできないことなんです。だから善とは偽である。だから偽善なんですよ。

私はそういう意味で、初めから人間というものは、努力して善いことをやろうとしなきゃいかん、大体、孔子でさえも「心の欲するところに従えども規をこえず」と言っているのは、七十歳になって初めて到達できた境地なんですからね。私どもが努力しないで、善いことができるはずがないと思います。だから私は、いつでも自分にムチ打ってがんばっています。教師となって立つ以上は、自分をできるだけ立派に、自分白身が伸びる姿勢を持たなかったなら、子供たちに何にも教えられないのではないのでしょうか。人を教える前には、まず自分の身を正す、つまり偽善者にならなければ教育はできない、とこう私は考えております。ですから映画の中で、校長さんが野杉先生にああいうことを教えたということはすばらしいと思って、そののところに感動して観ました。